

『文化遺産の危機と保存運動』

遺跡破壊のニュースが新聞に報導されな

い日がないと言っても過言ではない。また、民俗資料の散佚や民族芸能の衰退は急速で進んでいる。これらは、ここ十数年の、「地域開発」や「農業構造改善」事業の結果、遺跡や民族芸能を保存してきた、これまでの基盤そのものが消滅しつつあることの反映である。これに対し、遺跡をはじめとするこれらの文化遺産の保存を訴える運動も、この十年の間に大きく広がっており、最初は考古学者による遺跡保存の訴えにはじまり、最近では荘園跡の保存を唱える中世史家の運動も登場した。最初は、研究者が自らの資料の消滅を憂える次元から出発したこの運動も、最近では、住民無視の地域開発と、公害とに生命を脅やかされる地域住民の立ち上りと手を結び、住民と研究者の連帯のもとに、新しい町づくり、

村づくりの地域計画を考える運動の中に合流しつつある。

本書は、この十数年の運動のそれぞれの時点で発表された、文化遺産保存運動の記録と、そして文化遺産保存の理念に関する論文を集録したものである。

本書は第一部と第二部とからなる。第一部には、黒田俊雄、沢本淳、西川宏、梶浦恒男、片寄俊秀、西山卯三、稲垣榮三、家永三郎ら八氏の論文をおさめている。そこでは考古学者、文献史家、建築学者のそれぞれの立場から、文化遺産の危機をどう受けとめるか、保存の理念をどう考えるか、歴史学の学問内容、あるいは歴史教育とのかかわりでどう把握するか等のアプローチがある。

第二部には、これまでの文化遺産保存の主要な運動の記録と総括があり、近藤義郎、和島誠一、今井堯、春成秀爾、長山草、香川公一、松本晶行、中村康彦、井関護ら九氏の論文が収められている。奈良の平城宮や岡山県の津島弥生式遺跡の保存運動をはじめ、文化財訴訟にまで発展した難波宮跡

保存問題、あるいは去年からクロイズアップされた飛鳥問題などがここではとりあげられている。

また、第一部・第二部の諸論文の解説を兼ねて戦後保存運動の略史が石部正志氏によってまとめられている。

文化遺産保存運動は、拡大しつつあるとはいえ、「開発」と「保存」との関係をめぐる、あるいは、文化遺産保存継承の理念をめぐって、理論的にもまだまだ未整理の問題が多い。この問題の解決のためには、これまでの運動とその理念の到達点を知り、議論の水準を高めることが必要になっている。その点本書は、過去に発表されて、いまでは手に入りにくい多くの文献を集録しているので、右の要請に添えてくれるであろう。また巻末には、文化遺産保存問題に関する戦後の文献リストが集録されている点、便利である。

(A5版)二四一頁、一九七〇年一月刊、青木書店発行、定価八〇〇円)

(都出比呂志)